

I 新しい奨励品種

1 アキヒカリ(うるち)

系統名 ふ系104号

(1) 奨励品種に採用する理由

岩手県における主要品種の作付動向を見れば県中南部では中、晩生の品種が集中的に作付されており、作期の面からも無理な地帯への広がりも見られる。また危険分散の上からも、労働の面、施設の利用上からも強稈、良質、多収の早生品種が要望されている。また県北部(遠野地帯を含む)では、ハヤニシキ、フジミノリ、ササミノリの三品種が主要品種として作付されており、その中でフジミノリの占める割合が大きい。フジミノリは耐冷性、耐病性の面からは安定しているが、機械移植栽培の急増、収穫の機械化の面から倒伏性が問題となっている。このようなことからフジミノリ並の熟期のもので中生短稈、レイメイタイプの良質品種が強く要望されていた。

アキヒカリは、昭和48年から奨励品種決定調査に入れて特性並びに収量性を検討した結果、強稈で安定しており、また良質で多収性品種であるため奨励品種に編入し普及奨励したい。

(2) 来歴と特性の概要

ア 来歴 アキヒカリは1968年(昭43)に青森県農業試験場藤坂支場において、トヨニシキを母としレイメイを父として交配を行った。岩手県においては1973年(昭48)から「ふ系104号」の系統名で配付を受け生産力検定調査、並びに現地調査を行ってきた。

イ 特性の概要 出穂はフジミノリ並み、成熟はややおくれ本場では中生に属する。稈長はレイメイ並かやや長め、穂数はレイメイ並みかやや多い短稈偏穂重型品種、稈は太く強稈でレイメイに近い耐倒伏性をもっている。短苗で本田での草状はレイメイに類似し止葉が立ち草状は良好、葉色はフジミノリより淡い。熟色、穂揃良好であり、短穂で密粒、稀に短芒を生ずる。玄米の形状は中庸で稀に小さい腹白もみられるが光沢、透明度がよく、フジミノリより良質で搗精歩合はフジミノリより高いが胚芽がややおちにくい傾向がみられる。耐冷性についてはレイメイ並みである。いもち耐病性については推定遺伝子型はPi-a であり葉いもち、穂いもちともフジミノリより劣る。

また、イネカラバエ耐虫性はフジミノリより弱く、穂発芽性はレイメイに比較してやや出やすく中～やや難である。

以上のようにレイメイタイプで倒伏抵抗性もあるため機械移植栽培に適しており良質で多収性の品種である。

第2表 特性調査法

品種名	稈 芒				稈 先 色	粒 着 程 度	脱 粒 性	玄 米				品 質	等 級	
	細 太	剛 軟	有 無	長 短				粒 色	光 沢	心 白	腹 白			千 粒 重
アキヒカリ	太	剛	稀	短	黄白	密	難	良	や、良	ビ	ビ	21.3	上 の 下	4 の 上
フジミノリ	太	剛	無	無	黄白	や、密	難	中	中	極	ビ	21.6	中 の 上	4 の 中
レイメイ	太	剛	無	無	黄白	や、密	難	中	中	ビ~少	ビ	21.4	中 の 中	5 の 下
ハヤニシキ	太	剛	無	無	黄白	密	難	や、良	や、良	ビ	ビ	21.8	中 の 上	4 の 上

第3表 生育調査、収量調査表

(本場)

試験別	品種・系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成 熟 時			玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	玄 米 千粒重 (g)	品 質	検 査 等 級
				稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	m ² 穂数 (本)					
生 検	アキヒカリ	8. 8	9.27	70	16.8	422	68.6	110	21.3	上 下	3上~4上
成 苗	(標) フジミノリ	8. 8	9.26	84	19.5	394	62.3	100	21.6	中 上	3~4中
標 肥	(比) レイメイ	8. 9	9.28	68	18.3	427	62.4	100	21.4	中 中	3~5上
	(比) ハヤニシキ	8. 7	9.22	75	16.4	416	59.0	95	21.8	中 上	3~4上
生 検	アキヒカリ	8. 9	9.30	73	17.3	497	74.0	107	21.5	-	3~4中
成 苗	(標) フジミノリ	8. 9	9.30	88	19.9	418	69.4	100	21.7	-	3~4中
多 肥	(比) レイメイ	8.10	10. 1	71	18.7	488	67.6	97	21.5	-	4~4下
	(比) ハヤニシキ	8. 7	9.27	81	17.4	503	67.4	97	21.5	-	3~4中
生 検	アキヒカリ	8.11	9.29	70	16.8	416	59.4	113	22.1	上 下	-
稚 苗	(標) フジミノリ	8.12	9.28	80	18.6	368	52.6	100	22.0	中 上	-
標 肥	(比) レイメイ	8.12	9.29	67	18.0	409	55.9	106	22.1	中 中	-
	(比) ハヤニシキ	8.10	9.26	75	16.3	423	55.6	106	22.4	中 上	-
生 検	アキヒカリ	8.11	9.30	71	17.3	475	67.8	107	22.1	-	-
稚 苗	(標) フジミノリ	8.11	9.29	84	19.3	393	63.4	100	22.5	-	-
多 肥	(比) レイメイ	8.11	9.30	68	18.8	458	62.7	99	21.9	-	-
	(比) ハヤニシキ	8. 9	9.27	78	17.1	476	64.1	102	22.6	-	-

注) 昭和49年~昭和51年 3ヶ年平均値

検査等級は昭和51年の検査結果である。

(県南分場)

試験別	品種・系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟時			玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	玄米 千粒重 (g)	品質	検査 等級
				稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (m ²)					
生検	アキヒカリ	8.1	9.11	76	17.2	327	60.2	112	21.4	上 下	-
成苗	(標) フジミノリ	7.31	9.10	87	19.7	289	54.2	100	21.8	中下~中中	-
標肥	(比) レイメイ	7.31	9.11	74	18.8	318	55.9	103	21.8	中下~中中	-
生検	アキヒカリ	8.1	9.11	75	17.9	336	63.3	109	21.2	上 下	-
成苗	(標) フジミノリ	8.1	9.11	87	20.5	285	58.1	100	21.7	中 中	-
多肥	(比) レイメイ	8.1	9.11	73	19.5	308	57.3	99	22.0	中中~中下	-
生検	アキヒカリ	8.1	9.16	72	16.8	435	62.4	104	22.0	上 下	-
稚苗	(標) フジミノリ	7.31	9.14	85	19.1	401	60.5	100	21.7	中中~中上	-
標肥	(比) レイメイ	8.1	9.17	72	19.1	423	62.4	99	22.3	中中~中下	-
生検	アキヒカリ	8.1	9.16	75	17.4	466	66.0	107	21.8	上 下	-
稚苗	(標) フジミノリ	8.1	9.14	87	19.6	389	61.7	100	21.8	中中~中上	-
多肥	(比) レイメイ	8.1	9.17	74	19.3	417	59.1	95	22.0	中下~中中	-

注) 生検成苗標肥 昭和48年~昭和50年 3ヶ年平均値(昭和48予備調査を含む)

生検成苗多肥 昭和49年~昭和50年 2ヶ年平均値

生検稚苗標肥、多肥 昭和49年~昭和51年 3ヶ年平均値(但しレイメイは2ヶ年平均値)

(県北分場)

試験別	品種、系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟時			玄米重 (kg/a)	同左 比率 (%)	玄米 千粒重 (g)	品質	検査 等級
				稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (m ²)					
生検	アキヒカリ	8.10	9.23	72	16.9	428	65.7	110	21.7	中上~上下	-
成苗	(標) フジミノリ	8.11	9.25	87	19.5	365	59.8	100	22.0	中上~中下	-
標肥	(比) ハヤニシキ	8.8	9.20	81	17.1	393	59.9	100	22.5	中中~中上	-
生検	アキヒカリ	8.12	9.27	75	17.1	494	64.8	108	21.2	中上~下上	-
成苗	(標) フジミノリ	8.11	9.27	90	19.6	408	59.9	100	21.6	中中~中上	-
多肥	(比) ハヤニシキ	8.9	9.22	82	17.1	439	60.9	102	22.0	中中~中上	-
生検	アキヒカリ	8.17	9.25	70	17.1	439	53.0	102	22.0	中上~下上	-
稚苗	(標) フジミノリ	8.16	9.24	86	19.2	414	52.1	100	21.5	中上~下中	-
標肥	(比) ハヤニシキ	8.15	9.21	74	16.2	410	51.6	99	22.6	中上~下上	-
生検	アキヒカリ	8.17	9.27	75	17.5	495	58.7	110	21.6	中上~下中	-
稚苗	(標) フジミノリ	8.16	9.26	90	19.4	483	53.6	100	21.4	中上~下中	-
多肥	(比) ハヤニシキ	8.14	9.22	81	16.8	474	54.7	103	22.1	中上~下上	-

注) 昭和49~昭和51年までの3ヶ年平均

稚苗条件の成熟期は昭和49、50年の2ヶ年の平均値である。

(3) 普及上の留意点

ア 栽培上の注意

- (ア) 多肥による草型の乱れは少なく初数の確保も容易であるが、登熟性、耐病性からみた耐肥性はフジミノリより劣るため穂首分化期の追肥をさけるとともに無理な多肥栽培は避けること。
- (イ) いもち耐病性はフジミノリより弱いので充分注意して適期防除につとめること。
- (ウ) イネカラバエ耐虫性は弱と判定されているので多発生地帯では防除について考慮すること。
- (エ) 耐冷性はレイメイ並みであるが穂ばらみ期の低温時には水管理に注意する。

イ 適応地帯と見込面積

- (ア) 北奥羽地帯、北部沿岸地帯の山間部、高冷地帯を除く平坦部（馬淵川、安比川流域の標高200m未満の平坦部では中苗機械移植栽培は可能であるが、その他の平坦部では成苗手植栽培とする。）
- (イ) 北上川上流、遠野地帯の山間高冷地帯を除く平坦部（標高200mまでは稚苗機械移植栽培も可能であるが200m以上では中苗機械移植並びに成苗手移植栽培とする。）
- (ウ) 奥羽山間地帯は山間高冷地帯を除く平坦部。
- (エ) 北上川中、下流、南部山間、南部沿岸地帯の県南部では平坦部を除く山間山麓地帯（標高150m～250mまでは稚苗機械移植栽培が可能）

ウ 普及見込面積 8,000～10,000ha

2 わせとらもち（もち）

系統名 青系糯73号

(1) 奨励品種に採用する理由

「わせとらもち」は、早生種で短稈・強稈の品種であり、播種後の発芽、苗立のよい品種である。本県の県北地方において、奨励品種のうち、糯品種は「タツミモチ」と「サカキモチ」である。

「タツミモチ」は、早生で耐冷性は強いものの、稈が弱く、特に、機械移植においては倒伏し、収量品質を低下させる危険性が高い。「サカキモチ」は「タツミモチ」よりもやや強稈ではあるが、長稈であるため、機械移植においては、常に倒伏の危険にさらされるとともに、熟期の点でも県北地方では機械移植は困難である。

また、「タツミモチ」は、発芽・苗立ともやや難がある品種である。

これ等の問題を解決するため「わせとらもち」を奨励品種として採用した。

(2) 来歴と特性の概要

ア 来歴 わせとらもちは昭和38年青森県農業試験場において青系もち8号（とらもち）×フジミノリを母とし、シモキタを父として交配を行い以来、選抜固定をはかり1971年（昭46）青系もち73号の系統名を付し、同年から地域適応性の検討をすすめた結果、1973年（昭48）